

しゃぼんたまたまの



文：片山るん
絵：Sachi



ミキちゃんとユウくんはとてもなかよし。
いつも一緒に遊んでいます。
ミキ「わあ、菜の花が咲いてる！」
ユウ「きれいだね」
ミキ「ねえねえ、シャボン玉で遊ぼうよ」
ユウ「うん、いいよ」
二人は公園に行くことにしました。



ミキ「よし、いっぱい、シャボン玉作ろっと。いくよー」
ミキちゃんは、うんと強く吹きました。

ぷーーーーっ！

ミキ「見て見て！ シャボン玉たくさんできたよ！　すごいでしょ」
ミキちゃんは大喜びです。



ユウ「ぼくもやってみようっと」

ユウくんは割れないように気を付けて、やさしく吹きました。

ふう~~~~

ユウ「そおっと、そおっと。よーし、だんだん大きくなってきた」



ミキ「ユウくん、もっとたくさん作ってよ」

ユウ「ちょっと待って。大きいのが作りたいから」

ユウくんは、ゆっくりゆっくりストローを吹きます。

ミキ「あたしのほうがたくさんできるよ。みてみて」

ミキちゃんが吹くと、小さな小さなシャボン玉がたくさんできました。

でも、すぐに消えてしまいます。

ユウくんのシャボン玉は少ないけれど、なかなか割れずにふわふわと飛んでいきます。

ミキ「いいなあ、ユウくんのシャボン玉」

ミキちゃんはちよっぴりユウくんのシャボン玉がうらやましくなりました。

そのうちにだんだんくやしくなってきたのです。



ミキ「えい！」

突然、ミキちゃんは、ユウくんが作ったシャボン玉を割り始めました。

ミキ「こんなの、こんなの、だめー！ えい！ えい！」

ユウくんはびっくりしています。

ミキ「みんな割れちゃえ！」



ユウ「ひどいよ！ミキちゃん。なんでぼくのシャボン玉、割っちゃうの?!」
ユウくんの怒った顔を見て、ミキちゃんは はっとしました。
でも、あやまることができません。
ミキ「だって、だって、あたしのシャボン玉はちっちゃくてすぐに消えちゃうのに、ユウくんのはいつまでも飛んでて、ずるいんだもん」
ミキちゃんは、泣きながらそう思っていました。



ミキ「ユウくんが悪いんだ。あんな大きなシャボン玉を作るから。……でもごめんねって言わなきゃいけないのかな」

ミキちゃんがそんなことを考えていると、ユウくんの呼ぶ声が聞こえてきました。

ユウ「ミキちゃん！　すごいよ！　大発見！」



ユウ「シャボン玉が割れるといいにおいがするんだ！」
ユウくんは両手を広げて走り回りました。
残っていたシャボン玉がユウくんにとって、次々に割れました。
ユウ「なんのにおいだろう……そうだ、きっとこれは、春のにおいだ！」



ミキちゃんも鼻をくくんさせてみました。

ミキ「ほんとだ、なんだか甘いにおいがする」

ミキちゃんはユウくんの近くに行きました。

ミキ「ユウくん、シャボン玉割っちゃってごめんね」

ユウ「いいよ、いいよ。それより、シャボン玉が割れるといいにおいがするって、大発見じゃない？」

ミキ「そうだね。でも、いいなあ。ユウくんのシャボン玉はいいにおいがして」

ユウ「ええ？ この中にはミキちゃんのシャボン玉も入ってるんだから、ミキちゃんのシャボン玉だっていいにおいがするんだよ」

ミキ「あー、そっかあ」

二人は楽しくなってきました。



そして、もう一度、いっしょにシャボン玉を飛ばしてみることにしました。

ミキ「あたしのシャボン玉と、ユウくんのシャボン玉、なかよしだね」

ユウ「うん。いろんな大きさがあるときれいだね」

ミキ「この中に春がはいているのかあ。なんだかワクワクしちゃう」

ふたりはたくさんシャボン玉を飛ばしました。

大きいのも小さいのも、光を浴びて、虹色にきらきら輝いています。



ふたりが飛ばしたシャボン玉が空中で割れると、あたり一面に、甘くやわらかな匂いが広がりました。

春の匂いです。

ちょうちょもやってきました。

ミキ「うふふ。すごーい」

ミキちゃんはうれしくて、くるくる回りました。

ユウくんは両手を広げて走っています。



さあ、みなさんも、シャボン玉を飛ばしてみましょう。

大きくても小さくても大丈夫。きっと、その中には春がはいつているに違いありません。